



## 孤児や恵まれない子供たちに人生をささげた人

たにぐち せつどう  
谷口 節道 (1901~1986)

節道は、明治34年（1901）6月29日、上新川郡蟠川村小杉（現富山市小杉）に塚越石次郎、ヨシの間の7人弟妹の長女として生まれた。本名はセツである。信仰篤い母親の和讃を聞き、先祖の命日、年忌といった仏事が大切にされる環境で育った。

明治41年（1908）蟠川尋常小学校へ入学、堀川尋常高等小学校高等科、県立女学校と進学したが、大正7年（1918）中退し、望まれて弟子となり、仏門に入るため曹洞宗霊眼寺谷口泰乗の養女となった。この年の夏に得度し、谷口節道尼として歩み始めると、名古屋の関西尼学林へ入学し、勉学や修行に励んだ。節道17歳であった。大正13年（1924）実践女学校に入学したが、その後、宗祖道元の思想を深く究めようと、先輩の尼僧と共に、駒澤大学初の女子学生としてひたすら学問に打ち込んだ。

昭和3年（1928）駒澤大学を卒業し、曹洞宗大本山総持寺本山事業部の託児所へ勤めることとなった。元来子供好きで先生志望であった節道は子供に溶け込むのも早く、優しく穏やかな性格で周囲の信頼を集めた。この経験がもととなり、以後17年間、神奈川県や新潟県の幼稚園や託児所に勤務した。昭和20年（1945）4月、師匠泰乗尼の病状悪化の報を受けて富山に帰り、看病に尽くしたが、終戦を迎えた後の11月、師匠を看取ることとなった。

昭和21年（1946）、戦災孤児の窮状を見かねた曹洞宗尼僧団が、救護施設をつくり、孤児の面倒を見ることとなった。育児経験のない尼僧たちの中で保母経験があった節道は「わたしがやりましょう」とその役を買って出た。

節道は東京の戦災孤児2名を連れて富山に戻った。雪の中霊眼寺にたどり着き、20年以上荒れ放題になっていた寺で抱き合うようにして眠った。節道はこの時、親を失い、浮浪していた子供たちが安心して暮らせるように守り、成長させることに全身全霊を捧げようと心に誓った。昭和22年（1947）1月のことであった。

当時はまだ食糧難・物資不足の時代、節道は親戚や近隣の農家に頭を下げて食べ物に分けてもらい、節道自ら衣服を縫い、托鉢をしながら日々の窮状をしのいだ。施設の名称は戦災孤児の精神を癒し、新しく生まれ変わるための心の花園でありたいとして、釈迦生誕の地にちなんで「ルンビニ園」と名付けた。東京の戦災孤児の受け入れを続け、昭和22年（1947）4月から子供たちが地元の小学校に通学するようになった一方で、逃亡が相継ぎ、節道は富山駅にとどまらず遠く上野まで子供を連れ戻しに行くこともあった。

やがて園の存在が知られるようになり、徐々に物資や協力金が届き窮状を脱すると、施設を拡充した。昭和30年（1955）頃からは家庭不和、放任、離婚など親の都合で入所する子供が中心となった。昭和33年（1958）には昭和天皇皇后が行幸啓され、「みほとけにつかふる尼の はぐくみに たのしくあそぶ 子らの花園」と歌が贈られている。

子供達から「庵主（あんじょ）さん」と慕われた節道は、どんなに迷惑をかける子供がいてもひたすら自愛の心をもって受け入れ、学校を卒業させ、送り出した。卒園生が、ルンビニ園の仏様の前で結婚式を挙げたり、卒園生の子供の名付け親になったり等、節道と子供達のエピソードは数知れない。昭和35年（1960）には藍綬褒章、46年（1971）には勲五等瑞宝章を受章。昭和61年（1986）5月遷化した。85歳「布施・愛語・利行・同事」の道元の願に殉じた生涯であった。

<専門員 松井 功一>

## 平成30年度も引き続き顕彰される郷土先賢者



「思いっきり自己表現ができる場」を求めて  
「雪ん子劇団」を創り、育てた仏者

ゆきやま たかひろ  
雪山 隆弘 (1940~1990)

昭和15年（1940）、大阪府高槻市の浄土真宗常見寺の次男として生まれた。

早稲田大学文学部演劇専修に進学後、大学だけでなく劇団「四季」などでも演劇活動に没頭した。

卒業後は産経新聞社の記者やニッポン放送のラジオのパーソナリティとして働いた。この間、北日本放送のアナウンサーをしていた雪山玲子と結婚した。

その後、妻の実家である善巧寺（宇奈月町浦山）の後継者として得度し、善巧寺を「開かれた寺にしたい」と考えた。旧知の永六輔の協力を得て落語会を開催したり、心豊かな子供たちを育てようと日曜学校を開いたりした。だが、もっと自己表現できる場として児童劇を始めたいと思い、昭和54年（1979）11月25日、ことばの教室「雪ん子劇団」を誕生させた。

初舞台は、昭和55年（1980）3月26日、ミュージカル『うちのとうちゃんえらいんだ』、ぬいぐるみ劇『なかまたち』であった。劇団創立から11年目の平成2年（1990）9月、生涯を終えた。享年50歳であった。県内外での公演数は、80回を超えていた。

<専門員 根塚 昌志>